

平成29年度 干潟 Tidal Flats

はじめに

我が国の沿岸域は、磯、干潟、アマモ場、藻場及びサンゴ礁に代表される生物多様性の高い貴重な生態系を有しています。

私たちは、これらの生態系から魚介類や海藻などの食料を得るとともに、潮干狩りや観察会などの余暇や教育活動の場としても利用しています。また、これら沿岸域生態系の機能（水質の浄化、台風等による高波を防ぐ作用、二酸化炭素を吸収する働きなど）は、私たちの生活に様々な恩恵をもたらしてくれます。

「干潟」とは？

砂泥質の遠浅な海岸であり、内湾や河口域などの波の穏やかな潮間帯に形成される平らな地形を示します。

干潟は潮の満ち引きがあるため、干出時には鳥類（シギ・チドリなど）のえさ場として、冠水時には稚仔魚の生育場として多くの生物に利用されます。また、陸水域から流入する有機物等を生物が利用するため、干潟には水質を浄化する作用などもあります。

永浦干潟サイト（熊本県）



ハクセンシオマネキ

干潟調査

平成20年度から「毎年調査」と「5年毎調査」の2つの調査により、各サイトの複数エリアで底生動物（貝類・カニ類・ゴカイの仲間）などの群集組成を調べることで干潟の長期変化をとらえ、自然環境保全のための基礎情報を得ています。

平成29年度の調査では、日本沿岸の8箇所のサイトで10度目となる毎年調査を実施し、干潟表面や底土中に生息する動物の種類や数の変動を調べます。

中津干潟サイト（大分県）



カワアイ（左）とヘナタリ（右）

松川浦サイト（福島県）



マツカワウラカワザンショウ

厚岸サイト（北海道）



サビシラトリ

盤洲干潟サイト（千葉県）



クシテガニ

汐川干潟サイト（愛知県）



ウミニナ

松名瀬干潟サイト（三重県）



オカミミガイ

南紀田辺サイト（和歌山県）



コゲツノブエ

石垣川平湾サイト（沖縄県）



ルリマダラシオマネキ

● コアサイト
● 協力サイト

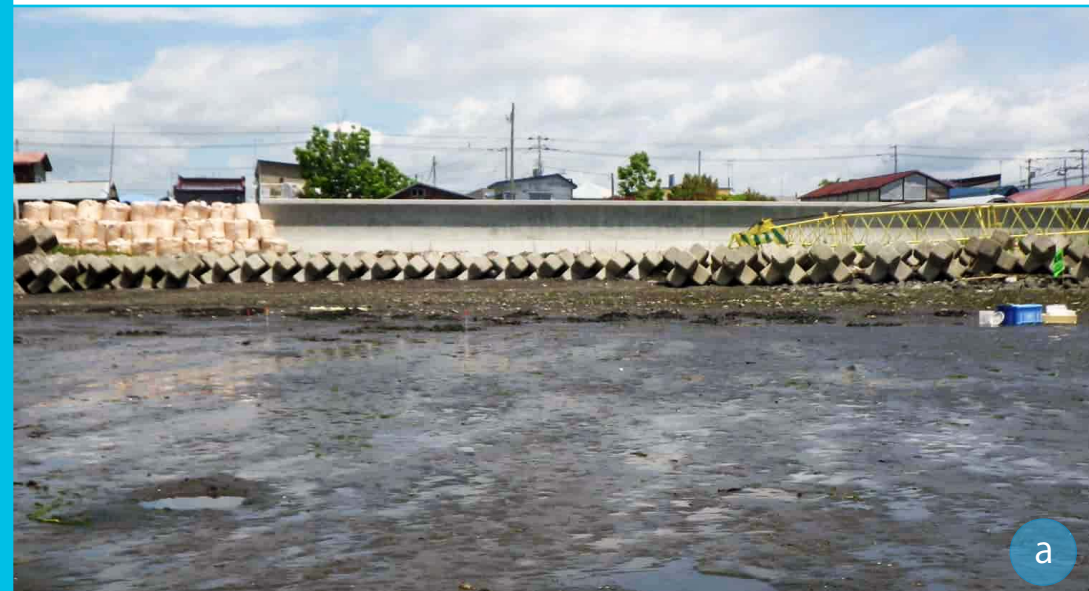
参考情報

- ☑ モニタリングサイト1000干潟調査の調査項目と内容 [▶ Link](#)
- ☑ 平成28年度モニタリングサイト1000 干潟調査速報 [▶ Link](#)
- ☑ 平成28年度モニタリングサイト1000 磯・干潟 調査報告書 [▶ Link](#)
- ☑ モニタリングサイト1000沿岸域調査 磯・干潟・アマモ場・藻場 2008-2012年度とりまとめ報告書 [▶ Link](#)

厚岸サイト

- 北海道厚岸町 -

- ▶ 北海道東部の別寒辺牛川流域の湿原から厚岸湖を通じて厚岸湾に至る水系に属する干潟です。
- ▶ 厚岸湾北湾奥の前浜干潟では、二枚貝のサビシラトリ等の北方に分布する種が見られます。また、厚岸湖の河口干潟の陸側には塩性湿地が広がり、希少生物であるアッケシソウやアッケシカワザンショウが見られます。



a

▲ A エリア：後背部での堤防改良工事がほぼ完了しました。



b

▲ B エリア：陸側から海側を望む。



c

▲ 定量調査風景：埋在性動物を調べるため、方形枠内にコアサンプラーを差し込んでいます（写真手前左）。



d

▲ A エリアで確認されたシロガネゴカイ科の一種。



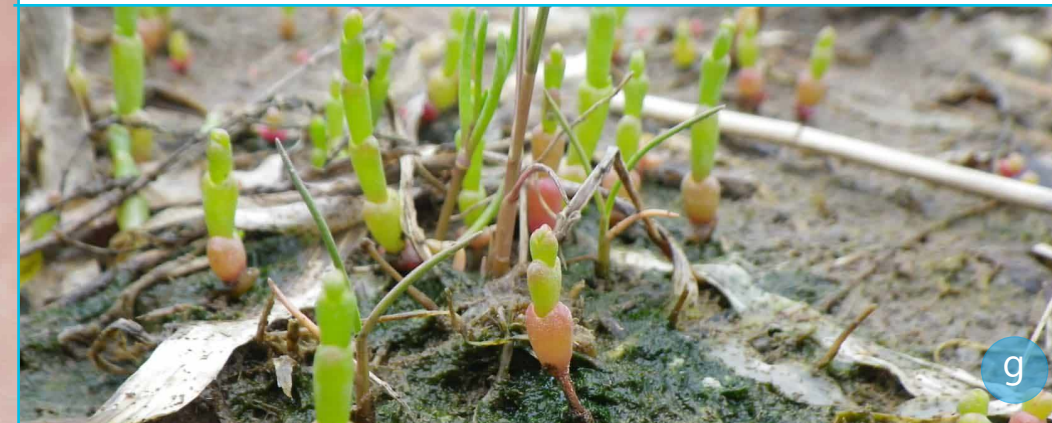
e

▲ 土中のサビシラトリが水管を伸ばしている様子。



f

▲ サビシラトリ。B エリアの潮間帯下部で多く確認されました。



g

▲ アッケシソウ。B エリアで生育している様子が見られました。

2017年度 調査結果概要 Aエリア

厚岸湾北湾奥の前浜干潟に設置した調査エリアです。後背での堤防改良工事がほぼ完了しました（写真 a）。本工事に伴って、潮間帯上部の面積が縮小傾向にあります。

優占種等の生息状況に目立った変化はありませんでしたが、例年に比べて、潮間帯上部は表在性及び埋在性の底生動物の密度が非常に低かったです。潮間帯下部では、ミズヒキゴカイ類の一種やシロガネゴカイ科の一種（写真 d）が特に多く観察されました。A エリア周辺の転石帯では、例年と同様に外来種であるキタアメリカフジツボが確認されました。

2017年度 調査結果概要 B エリア

厚岸湖の東側最奥部の河口干潟に設置した調査エリアです。定量調査では、優占種等の生息状況に目立った変化はありませんでしたが、潮間帯上部ではエビジャコが、潮下帯下部ではサビシラトリ（写真 e、f）が例年よりも多く出現した印象がありました。定性調査では、ホソウミニナ、サビシラトリ、エビジャコ等が確認されました。今年度も希少種のアッケシカワザンショウ（準絶滅危惧*）が確認されました。

□ 調査日 2017.6.27 -28

□ サイト代表者：仲岡雅裕
（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター）

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】

仲岡雅裕【a-g】・頼末武史・橋本真里菜・高星和浩・井坂友一・桂川英徳・山口遥香・長谷川貴章・鈴木夢乃・松井風河・大塚賢・能重光希（北海道大学）

* 環境省レッドリスト 2017

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 29 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
（http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h29.pdf）

松川浦サイト - 福島県南相馬市 -

- ▶ 仙台湾の南端部に位置し、砂洲によって太平洋と隔てられた南北に細長い潟湖内に形成された、東北地方最大級の干潟です。
- ▶ 震災以前は 200 種ほどの底生動物が確認されており、種多様性が高い干潟でした。
- ▶ 仙台湾沿岸の干潟へ、底生動物を供給する役割をもった干潟の一つです。



a



c



e

▲ A エリア：大洲海岸の砂嘴上では防潮堤の復旧工が進んでいます。干潟縁辺部でも遊歩道の復旧工が始まり、フレコンバックが設置されていました。干潟上には緑藻が繁茂し、ホソウミナナやマツカワウラカワザンショウが高密度で生息しています。

▲ 潮間帯上部での定量調査。稚貝～大型個体まで多数のホソウミナナが出現したため、計数作業が一苦労でした。枠内に出現した全てのホソウミナナを採取してバット上に並べ、数を数えました。

▲ オキシジミ：B エリアで多く出現する埋在性の二枚貝。「シジミ」という名前がついていますが、食用にする「シジミ（ヤマトシジミ *Corbicula japonica*）」とは分類的にも形態的にも、かなり異なっています。



b



d



f

▲ B エリア：震災以降、潮の引きがあまりよくありませんでしたが、今年度は潮間帯下部まで干潟が干出しました。岸際や河口部には防潮堤が建設され、干潟に入れるルートは限られていました。

▲ 潮間帯下部で今年度になって確認されるようになったシロナマコ。分布の中心は潮下帯と考えられ、干潟ではほとんど出現しない種です。

▲ コメツブガイ：文字通り「米粒くらいの大きさ」の表在性巻貝。宮城県の準絶滅危惧種。今年度の調査では、B エリアの定量サンプル中に多く出現しました。

□ 調査日 2017.6.22 -23

□ サイト代表者：金谷 弦（国立環境研究所）

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】

金谷 弦（国立環境研究所）【a, c】
鈴木孝男（みちのくベントス研究所）
多留聖典（東邦大学）【b, e, f】

海上智央（自然教育研究センター）【d】
青木美鈴（日本国際湿地連合）

* 環境省レッドリスト 2017、** 環境省海洋生物レッドリスト 2017

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 29 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h29.pdf)

盤洲干潟サイト - 千葉県木更津市 -

- ▶ 東京湾東岸部に位置する小櫃（おびつ）川の河口部より広がる干潟で、東京湾で現存する最大級の面積の干潟です。また、「日本の重要湿地500」に選ばれています。
- ▶ 砂質の前浜干潟ではアサリや多毛類などが見られ、泥質が強い小櫃川右岸の三角洲の後背湿地では、ヨシや転石の間に巻貝やカニ類、クレークには多毛類が多く見られます。
- ▶ 本サイトでは2エリア（A・B）で調査を実施しています。



a

▲ A エリア：潮間帯上部のヨシ原と砂質の前浜干潟との境界部。昨年度までは小規模な転石帯が見られましたが、本年度は砂に埋没していました。



b

▲ B エリア：底質は砂泥質または泥質です。浅いクレークがあり周囲にはヨシ原があります。

2017年度 調査結果概要 A エリア

ヨシ原と砂質の前浜干潟との境界部に砂が堆積し、露出していたヨシの根・地下茎部が覆われ、転石は埋没していました（写真 a）。

例年同様に、定量調査では潮間帯上部・下部ともに特定の種が高密度に出現する傾向に変化はなく、ホソウミニナ、イボキサゴ、アサリ、ツツオオフエリア（写真 c）が多く見られました。定性調査では潮間帯上部のヨシ原内でフトヘナタリ、下部ではテナガツノヤドカリ（写真 d）が確認されるとともに、ミサキギボシムシ、ツボミも複数個体確認されました。また、2010 年の記録以降に出現していなかった端脚目の *Eohaustorius* 属の一種が少数ですが確認されました。



c

▲ ツツオオフエリア：多毛類の一種。優占種の一つであり、干潟の表層に多く見られました。動きが速いため、掘り起こしても、すぐに砂の中に潜ります。



d

▲ テナガツノヤドカリ：触角は羽毛状で、左のハサミ（鉗脚：かんきやく）が大きい。イボキサゴの殻を使う個体が多いです。

2017年度 調査結果概要 B エリア

例年同様に、定量調査では種数、個体数ともに少数であり、ムロミスナウミナナフシ（写真 e）、チゴガニ等が見られました。定性調査では干潟面に加えて転石帯やヨシ原において、カニ類など大型で移動性の高い種や、小型の巻貝など低密度に出現する種が確認されました。潮間帯上部の泥質干潟では、昨年度に観察されたヒメアシハラガニは確認されず、生息状況が不安定である可能性があります。一方で、河道際では昨年度に引き続き複数のウミニナが確認されたほか、2009 年度のみに記録されていたヤマトクビキレ（写真 f）が少数確認されました。また、本調査エリア近傍のヨシ原では、希少種であるシオマネキ（絶滅危惧Ⅱ類*）の生息が確認されました（写真 g）。



e

▲ ムロミスナウミナナフシ：等脚目の一種。砂泥質の場所で、ほぼ垂直で浅い穴を掘り、その中で生息しています。



f

▲ ヤマトクビキレ：巻貝の一種。河道際の潮間帯上部の漂着物下に生息していました。盤洲干潟での生息数はかなり少ないです。



g

▲ シオマネキ（絶滅危惧Ⅱ類*）：B エリア近傍のヨシ原内で確認されました。現在のところ、盤洲干潟は本種の生息地の東限です。

* 環境省レッドリスト 2017

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 29 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h29.pdf)

□ 調査日 2017.6.7-9
□ サイト代表者：多留聖典
(東邦大学理学部東京湾生態系研究センター)

□ 調査者・調査協力者（所属）【撮影写真】

多留聖典（東邦大学）【a-g】
金谷 弦（国立環境研究所）
海上智央（自然教育研究センター）

青木美鈴（日本国際湿地保全連合）
井藤大樹（日本国際湿地保全連合）
小原ヨシツグ（漫画家）

尾島智仁（日本水中科学協会）
尾島雅子（日本水中科学協会）

汐川干潟サイト - 愛知県豊橋市・田原市 -

- ▶ 汐川干潟は三河湾奥の田原湾に位置し、汐川をはじめ、蜷川・紙田川等が流入している大きな河口干潟です（写真 a、b）。
- ▶ 干潟表面にはウミニナ・ヘナタリ等の巻貝類、底土中にはオキシジミ・ユウシオガイ等の二枚貝類やミズヒキゴカイ等の多毛類が数多く生息しています。
- ▶ 本サイトでは3つのエリア（A～C）の内、2010年度以降は2エリア（B・C）で調査を実施しています。



a

▲ B エリア：汐川河口から田原湾に広がる干潟です。昨年度、干潟の表面に見られたエイの食痕や潮間帯上部で見られたアオサの堆積は見られませんでした。



b

▲ C エリア：紙田川河口に位置する干潟です。干潟の海側で埋め立て工事が始まりしました。本エリアでも、昨年度に見られたエイの食痕は見られませんでした。

2017年度 調査結果概要 B エリア

本エリア全体ではウミニナが分布し、潮間帯上部から中部ではヘナタリが高密度で生息していました。また、昨年度と同様に、ヘナタリの稚貝が多数確認でき、マキガイイソギンチャクが付着した絶滅危惧Ⅱ類のイボウミニナも少数見られました（写真 c）。潮間帯中部で見られたマガキ集団の間隙にはフジツボ類やマガキに寄生する貝類（カキウラクチキレモドキ）が見られ、潮間帯下部では絶滅危惧Ⅱ類のハマグリが確認されました（写真 d）。



c

▲ イボウミニナ（絶滅危惧Ⅱ類*）とその殻上に生息するマキガイイソギンチャク（絶滅危惧Ⅱ類**）（矢印）。



d

▲ ハマグリ（絶滅危惧Ⅱ類*）：日本を代表する二枚貝の一つですが、絶滅が危惧される種です。汐川干潟で確認されることは珍しいです。

2017年度 調査結果概要 C エリア

干潟の表面にはウミニナ・ホソウミニナ・イボウミニナ・ヘナタリ等の巻貝が、底土中にはミズヒキゴカイ類（写真 e）やオキシジミ等の二枚貝類が広く分布していました。特に潮間帯上部では高密度でウミニナが生息しており、オオノガイの幼貝も見られました（写真 f）。また、潮間帯下部では昨年度に続きアサリの稚貝が見られました。今年度もヒガタアシ（特定外来生物）は確認されませんでした。

本エリアの海側では、干潟の埋め立て工事が始まっており、本工事が生物相に与える影響が懸念されます。今後の生物相への影響を評価するためにも、引き続きモニタリング調査を継続していくことが重要です。



e

▲ ミズヒキゴカイ類の一種：底土全体で確認されました。



f

▲ オオノガイの幼貝（殻長 15 mm 程度）：二枚貝類の一種。



g

▲ 調査風景（C エリア潮間帯下部）：底質は昨年より泥っぽく、ぬかるみにはまることがありました。

□ 調査日 2017.4.12
□ サイト代表者：木村妙子
（三重大学大学院生物資源学研究科）

□ 調査者・調査協力者（所属）【撮影写真】
木村妙子（三重大学） 【a-g】 吉岡志帆（三重大学） 藤岡エリ子（汐川干潟を守る会）
木村昭一（三重大学） 村山 棕（三重大学） 藤岡純治（汐川干潟を守る会）

* 環境省レッドリスト 2017

** 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 29 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
（http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h29.pdf）

松名瀬干潟サイト - 三重県松坂市 -

- ▶ 伊勢湾の西側に位置する干潟です。伊勢湾は三河湾と併せると国内最大面積を誇る内湾です。
- ▶ ヨシ原・塩沼・感潮クリーク、泥質・砂質干潟、アマモ場といった陸から海への移行帯（エコトーン）が残存する貴重な場所です。
- ▶ 周辺海域は、アサリ・ハマグリ・ヤマトシジミの好漁場であり、国内有数の魚介類の産地です。

2017年度 調査結果概要 Aエリア

潮間帯上部の後背湿地には、カワザンショウガイ、ホソウミニナ、ヘナタリ、フトヘナタリといった腹足類が高密度に分布していました。前浜干潟の中部の底土上には、ホソウミニナやアラムシロ、ネズミボヤが高密度に分布していました。潮間帯下部にも底土上にアラムシロとネズミボヤが分布していました。底土中には、小型のハスノハカシパン、ギボシムシ類、タマシキゴカイが見られました。アラムシロの殻上にはマキガイイソギンチャクが共生していました。また、潮間帯中部には、アサリや肉食性の外来種であるサキグロタマツメタが見られました。

2017年度 調査結果概要 B エリア

潮間帯上部の調査ポイントでは、フトヘナタリ、チゴガニが生息し、B エリア付近のヨシ原には、環境省レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に指定されているオカミミガイやハクセンシオマネキが分布していました。潮間帯下部には、ウミニナやホソウミニナが底土上に分布し、底土中にゴカイ科の多毛類が生息していました。昨年よりもウミニナの密度が高く、下部のカキ礁にはウネナシトマヤガイやシロスジフジツボ、ケフサイソガニが生息していました。



▲ A エリア（松名瀬干潟）：伊勢湾に面した前浜干潟です。潮上部には砂丘を挟んで後背湿地が発達しています。調査時は、潮干狩りを楽しむ人々が多く見られました。

▲ ハマグリ：A エリアの潮間帯中部で確認されました。

▲ ハマガニ：B エリアの塩性湿地で確認されました。



▲ B エリア（櫛田川）の塩性湿地：櫛田川河口部に形成された河口干潟です。底質は砂であり、潮間帯上部にはヨシ原が形成されています。

▲ ヒモイカリナマコ：A エリアの潮間帯中部で確認されました。

▲ 調査の様子：三重中学校と三重高校のみなさんに調査を手伝ってもらいました。

□ 調査日 2017.4.30

□ サイト代表者：木村妙子（三重大学）

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】

木村妙子 [a-f]・山本敦也・片平浩孝・村山 棕（三重大学生物資源学研究科）、小西伴尚・石井智也・小山裕輝・水本凱也・永田昇久・林 嘉音（三重高校）、小島慧音・村林 樹・沖田龍之介・櫛谷圭介・谷口誓風・角野百千・山本智輝・小島佑太・嶋田 風・青山大貴・金井健太郎・野嶋剛至・小林 隼・野村彩希・井出直希（三重中学）、山本洋輝（京都大学）

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 29 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）

(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h29.pdf)

英虞湾サイト - 三重県志摩市 -

- ▶ 英虞湾はリアス式海岸特有の小さな支湾が多数形成されている風光明媚な内湾で、真珠の養殖が有名な場所です。
- ▶ 周辺には南日本に特有な海岸植生（ハイネズ、トベラ、ウバメガシ）が確認されるなど、環境省「生物多様性の観点から重要度の高い湿地」にも選ばれている貴重な場所です。
- ▶ 英虞湾の中央部と北部の湾奥に形成されている前浜干潟で調査を実施しています。



a



c



e

▲ A エリア（登茂山）：英虞湾のほぼ中央部に位置し、急峻な崖に囲まれた小湾の奥にある前浜干潟です。潮間帯上部にはハマサジ等の塩生植物が見られます。

▲ ツバサゴカイ棲管：A エリアの潮間帯下部で見られました。

▲ イボウミニナ：B エリアの潮間帯下部で確認されました。A エリアでも多く確認されました。



b



d



f

▲ B エリア（小才庭）：英虞湾北部の支湾奥部に位置する前浜干潟です。

▲ ツバサゴカイとヤドリムツアシガニ：A エリアの潮間帯下部における定性調査で確認されました。

▲ シラオガイ：A、B エリア共に確認されました。

□ 調査日 2017.5.27 -28

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】

□ サイト代表者：木村妙子（三重大学）

木村妙子【a-f】・木村昭一・村山 棕・吉田圭汰（三重大学）

2017年度 調査結果概要 Aエリア

潮間帯上部の底土表面にはウミニナ、ヘナタリ、フトヘナタリが生息しており、底土中にはチゴガニが見られました。定性調査では、絶滅危惧Ⅰ類*のオカミミガイ科のシイノミミミガイや、絶滅危惧Ⅱ類*のドロアワモチが確認されました。潮間帯下部には、ウミヒルモ場が形成され、絶滅危惧Ⅱ類*のイボウミニナが優占し、マガキにスガイやシボリガイ、サラサフジツボが付着していました。底土中にはシオヤガイ、絶滅危惧Ⅱ類**の多毛類であるツバサゴカイ（写真c、d）と共生するヤドリムツアシガニ（写真d）が確認されました。

2017年度 調査結果概要 B エリア

潮間帯上部の底土表面には、ウミニナやヘナタリが高密度に分布し、その他にはウミニナの殻上に付着するツボミガイが確認されました。底土中にはチゴガニが見られました。潮間帯下部にはコアマモ場が形成され、絶滅危惧Ⅱ類*のイボウミニナ（写真e）やヘナタリが生息していました。腹足類や二枚貝類の殻上にサラサフジツボが付着し、底土中には二枚貝類のオキシジミやシオヤガイ、トガリユウシオガイが見られ、チロリ科、ツバサゴカイ等の多毛類も生息していました。定性調査ではコゲツノブエやシラオガイ（写真f）も見られました。潮上帯のヨシ原にはフトヘナタリ、カワザンショウ、ツブカワザンショウ、ミヤコドリ、ウスコミミガイや、絶滅危惧Ⅱ類の*ナラビオカミミガイが生息していました。

* 環境省レッドリスト 2017、** 環境省海洋生物レッドリスト 2017

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 29 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h29.pdf)

南紀田辺サイト - 和歌山県田辺市 -

- ▶ 紀伊半島南西部の田辺湾に位置する干潟です。紀伊半島沿岸域は黒潮の影響を受けるため、多種多様な海洋生物が確認できます。
- ▶ カニ類や二枚貝・巻貝類の種数が多く、環境省レッドリストに掲載されている希少種が 30 種以上確認できます。
- ▶ 南紀白浜から田辺湾一帯は、環境省「重要湿地」にも選定されている場所です。

2017年度 調査結果概要 Aエリア

ヨシ原のある潮間帯上部では特に腹足類と甲殻類が、軟泥の下部では特に甲殻類が多く出現しました。具体的な種としては、潮間帯上部ではチゴガニが、下部ではコゲツノブエが多く確認されました。準絶滅危惧のオチバガイ*が本サイトで初めて確認され、ニッポンマメアゲマキが A エリアでは初めて採集されました。絶滅危惧Ⅱ類のウモレベンケイガニ**（写真 d）が今年も見られました。他にもミヤコドリ、クリイロカワザンショウ、カワアイ、ヘナタリ、ハザクラ、トガリユウシオガイ、スダレハマグリ等の希少貝類やハクセンシオマネキとユビアカベンケイガニも引き続き確認されました。潮間帯下部では泥質干潟に特徴的な希少種が多数見られ、比較的良好な状態が維持されていると思われます。

2017年度 調査結果概要 B エリア

潮間帯上部、下部とも比較的豊かで多様な底生動物相が形成されていました。潮間帯上部ではコケゴカイが、下部ではコゲツノブエが優占していました。ウミギク、タガソデガイ、ミナミエラコが初めて採集され、2012 年の調査以来確認されていなかったアシヤガイが採集されました。ムシロガイ、スジホシムシモドキヤドリガイ、ハボウキガイ、シオヤガイ、ケマンガイ等の希少貝類も例年に引き続き多数確認されました。希少種としては、他にもテナガツノヤドカリが比較的多く確認され、オサガニ、アカホシマメガニ（写真 f）、チゴイワガニ等も例年に引き続き記録されました。特に、潮間帯下部では砂質干潟に特徴的な種が多数見られ、A エリアと同様に良好な環境が維持されていると考えられます。



▲ A エリア（内之浦）：底質は軟泥で、潮間帯上部はやや固く長靴でも歩けますが、下部はぬかるんでおり、長靴では歩くことができません。

▲ マングローブテッポウエビ（準絶滅危惧）**：A エリアで確認されました。

▲ 定量調査の様子。方形枠内にコアサンプラーを差し込み、底泥中に生息する動物をサンプリングします。



▲ B エリア（鳥の巣）：小さな入り江の先端近くに位置し、潮間帯上部は砂質干潟になっています。潮間帯下部にはコアマモ・アマモが群生しています。

▲ ウモレベンケイガニ（絶滅危惧Ⅱ類）**：今年度の調査でも例年どおり、本種が確認されました。

▲ アカホシマメガニ（準絶滅危惧）**：例年の調査と同様に今年度の調査でも本種の生息が確認できました。

□ 調査日 2017.6.10-11

□ サイト代表者：古賀庸憲（和歌山大学）

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】

古賀庸憲（和歌山大学）【a-b,d-f】

香田 唯（兵庫県在住）

渡部哲也（西宮市貝類館）【c】

青木美鈴（日本国際湿地保全連合）

* 環境省レッドリスト 2017、** 環境省海洋生物レッドリスト 2017

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 29 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h29.pdf)

中津干潟サイト - 大分県中津市 -

- ▶ 瀬戸内海の南西端に位置する周防灘に面した干潟です。
- ▶ 瀬戸内海では最大面積を誇る自然干潟であり、その環境は一様ではなく、調査エリアを3エリア設けています。また、絶滅危惧種のカブトガニが生息している数少ない干潟のひとつです。
- ▶ 主に砂質で塩性湿地や転石帯、コアマモ等の植生帯もあり、実に多様な底生動物（ベントス）が生息しています。

2017年度 調査結果概要 Aエリア

今年度の調査では、山国川の上流側の調査地点でヘナタリが優占していました。表在性動物としては、カワザンショウガイ、ウズラタマキビ、ヘナタリ、フトヘナタリ、クロヘナタリ、シマヘナタリ、カワイ等、の貝類や、シオマネキ、ハクセンシオマネキ等の甲殻類が、埋在性動物では、オチバガイ、オキナガイ、オキシジミ、ソトオリガイ等の二枚貝類や、ヤマトカワゴカイ、コケゴカイ、ミズヒキゴカイ、チロリ、ウミイサゴムシ等の多毛類といった毎年確認される底生動物が確認されました。本エリアでは、昨年度と同様にカブトガニは確認されませんでした。



a

▲ A エリア：山国川の河口に広がる河口干潟です。底質は砂泥質で、一部礫が混じります。

2017年度 調査結果概要 Bエリア

今年度の調査では、2014 年以降出現していなかったオオシンデーンカワザンショウが確認されました。また、ウミサボテンが多い年によく出現するニュウトウタテジマウミウシや、ヒラフネガイ、アミメキンセンガニ、ヒダビルも確認されました。さらに、カブトガニが B エリアで初めて確認されました（写真 c）。毎年出現する表在性動物では、ホソウミニナ、ゴマフダマ、ヤマトオサガニ、マメコブシガニ、埋在性動物ではアサリ、シオフキ、バカガイ、マテガイ、コケゴカイ、ミズヒキゴカイ、ツツオオフエリア、フサゴカイ、ツバサゴカイ、ムギワラムシ、ウミイサゴムシが確認されました。昨年度に引き続き、コアマモの繁茂面積が拡大している等の変化が見られました。

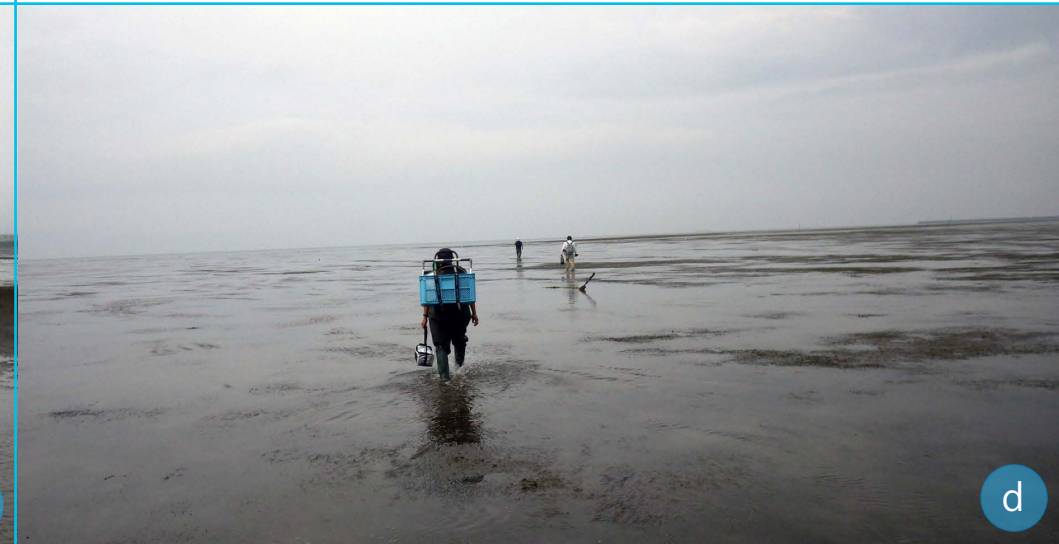


b

▲ B エリア：広大な砂質干潟です。調査当日は小雨が降っていました。

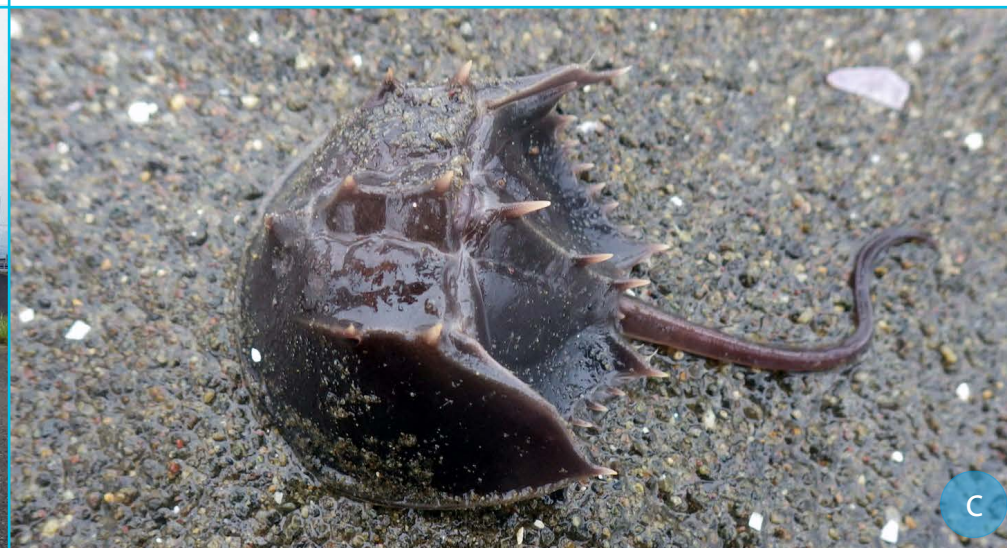
2017年度 調査結果概要 C エリア

表在性動物では、シカメガキが付着したウミニナ、イボウミニナや、クロヒメガキ、ヤマトオサガニ、シワオウギガニが確認されました。埋在性動物ではイチョウシラトリガイが複数個体採集された他、アサリ、マテガイ、ツバサゴカイ（写真 e）、モバケヤリムシ、コケゴカイ、イワムシ、ムギワラムシ、ミドリシャミセンガイ等も観察されました。調査地点間の移動中にヒダビルも確認できました。今年度は、エリア全体でイボウミニナの生息範囲が拡大していましたが、コアマモの面積は昨年度より減少していました。干出状況がよくなかったせいか、ムギワラムシの棲管は多数確認できましたが、虫体全部を採集することはできませんでした。



d

▲ C エリア：砂泥質の干潟です。干潟の後背地には塩性湿地が、沖合にはコアマモ帯や転石帯があり、多様な環境が見られます。



c

▲ カブトガニ：これまで本種は B エリアで確認されたことがありませんでしたが、今年度、B エリアで初めて確認されました。



e

▲ ツバサゴカイ：B・C エリアで確認されました。写真右側が前体部です。

□ 調査日 2017. 6. 23 -25

□ サイト代表者：浜口昌巳

(水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所)

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】

浜口昌巳（水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所）
梶原直人（水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所）【a,b,d】
西 栄二郎・森田 遥・三羽達也・松尾香菜子（横浜国立大学）

井藤大樹（日本国際湿地保全連合）【c,e】

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 29 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h29.pdf)

永浦干潟サイト - 熊本県上天草市 -

- ▶ 有明海と八代海を結ぶ瀬戸に位置する永浦島の南部の前浜干潟（写真 a,b）で、周囲は雲仙天草国立公園に指定されています。
- ▶ 底生動物の種多様性が高く、マキガイイソギンチャク、ウミニナ、テナガツノヤドカリ、ツバサゴカイ等が生息しています。
- ▶ 本サイトでは2エリア（A・B）で調査を実施しています。



▲ A エリア：ハクセンシオマネキの群生地として有名な干潟です。底質は、潮間帯上部は砂泥質、下部は砂泥質又は泥質です。調査当日は雨天であったため、カニ類等の動きが不活発でした。



▲ B エリア：干潟上縁に人工物はなく、自然の形状が保たれています。底質は、潮間帯上部・下部とも砂泥質で、下部では一部に泥質の場所も見られます。

2017年度 調査結果概要 A エリア

ホソウミニナ、ウミニナ、テナガツノヤドカリ、ユビナガホンヤドカリが例年同様に数多く確認されるとともに、希少種であるツバサゴカイ（絶滅危惧ⅠB類*）（写真 c）、マキガイイソギンチャク（絶滅危惧Ⅱ類**）も複数確認されました。ここ数年増加傾向にあるイボウミニナは、今年度も多くの個体が確認された一方、過去数年増加傾向にあったホトトギスガイは、昨年度に続き、あまり確認されませんでした。調査エリアに含まれる塩性湿地（写真 d）では、昨年度に見られたシマヘナタリやフトヘナタリが確認できず、年々、生物相が貧弱になっている可能性があります。その一因として、湿地と海を繋ぐ水路の水門が閉鎖されたことにより、湿地内の調整池の水位上昇や低塩分が起ったことが影響しているものと考えられます。



▲ ツバサゴカイの棲管（せいかん）（矢印）：本種の棲管は、土の中でU字状の構造となっており、出入口部分のみが干潟表面に突出します。



▲ 塩性湿地（A エリア）：ヨシを主体とする小規模な湿地で、塩生植物であるホソバノハマアカザ、シバナ、ナガミノオニシバがわずかに生育しています。

2017年度 調査結果概要 B エリア

テナガツノヤドカリ、ユビナガホンヤドカリが例年同様に数多く確認されました。ここ数年増加傾向にあるミドリシャミセンガイ、イボウミニナは、今年度も多くの個体が確認されました。また、ゴマフダマ、マテガイ、ヨツアナカシパン（写真 e）も確認され、ゴマフダマ、マテガイは増加傾向にあるようです。今年度は調査エリアに含まれる塩性湿地で、ヨシの刈り取りが行われておらず、ヨシ帯を好む微小巻貝のクリイロカワザンショウやハマガニ、ウモレベンケイガニ等が確認できました。潮下帯には小規模ではありますが、アマモが繁茂しており、今年度はアマモの分布が干潟側（陸側）に広がっていました（写真 f）。



▲ ヨツアナカシパン：ウニ類の一種。



▲ B エリアのアマモ：アマモの分布が干潟側（陸側）に広がっていました。

□ 調査日 2017. 5. 9-10
□ サイト代表者：逸見泰久
（熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター）

□ 調査者・調査協力者（所属）【撮影写真】
逸見泰久（熊本大学） 【a-f】 前川 匠（熊本大学） 北岡 匠（熊本大学）
渡部哲也（西宮市貝類館） 笠原悠生（熊本大学） 佐藤 優（熊本大学）
竹下文雄（熊本大学） 佐久川尚人（熊本大学） 逸見高志（熊本県熊本市）

* 環境省海洋生物レッドリスト 2017
** 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック
このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 29 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
（http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h29.pdf）

石垣川平湾サイト - 沖縄県石垣市 -

- ▶ 石垣島西北岸にある内陸に入り込んだ川平湾（かびらわん）に位置する干潟です。
- ▶ 琉球列島固有種のリュウキュウコメツキガニとミナミコメツキガニがみられ、二枚貝のウメノハナガイもよく確認されます。
- ▶ 川平湾と後背の於茂登岳一帯は、その美しい景観と地域固有の文化史的価値から、国の名勝に指定されています。

2017年度 調査結果概要 Aエリア

定量調査では、例年どおり、ウメノハナガイ、ミナミコメツキガニ、リュウキュウコメツキガニ、タテジマユムシ等が出現し、優占種に目立った変化はありませんでした。例年、潮間帯下部で、砂に潜った状態のフタスジナマコがよく観察されますが、今年は確認できませんでした。本調査開始以降、初めてチャプタルベニツケガニとミナミウロコガイが方形枠内に出現しました。ミナミウロコガイは環境省レッドリスト 2017 及びレッドデータおきなわ（沖縄県版レッドデータブック）で準絶滅危惧として掲載されています。

定性調査においても、ホルトハウスオサガニ（準絶滅危惧 **）、ミットゲヤワスナモグリ（仮称）、フジテガニ（準絶滅危惧 **）等、約 10 種が本調査開始以降、初めて確認されました。

2017年度 調査結果概要 B エリア

定量調査では、A エリアと同様に、優占種の出現傾向に特段の変化はありませんでした。

定性調査に関して、今年度は B エリアでも、ヒメフタハベニツケガニ、ウチノミカニダマシ、ヒツメオウギガニ、ケブカガニ、スキゲヒバリ、リュウキュウヒバリガイ、ニセヒロクチカノコ、カノコガイ、リュウキュウウミニナ等、複数の初確認種が出現しました。2015、2016 年度の調査で連続して出現していたニッコウガイ（絶滅危惧 I 類 *）が、今年度は確認されませんでした。

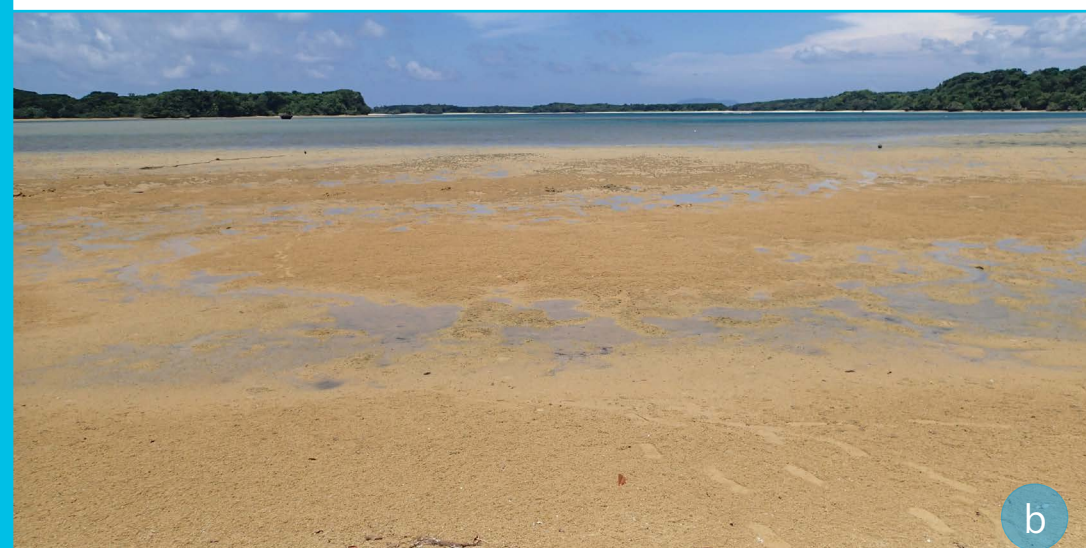
西側に位置するマングローブ湿地で、2007 年以来、10 年ぶりに定性調査を実施しました。かつて見られたニセヒロクチカノコやカヤノミカニモリは確認されましたが、ヤエヤマヘナタリは消失し、今回はコゲツブエが優占していました。



▲ A エリア（湾口部）：潮間帯下部のアマモ場から後背地を望む。湾口部の潮間帯にはギボシムシ類のマウンドが点在し、潮間帯下部に出現するアマモ場は被度も高く、昨年よりも生育範囲がやや広がっている印象を受けました。

▲ ヘゴノメミミガイ：A エリア後背地の石灰岩性の岩礁域で観察されました。

▲ 定性調査の様子。湾奥に流入する小川でヤビーポンプを使った調査を行いました。



▲ B エリア（湾奥部）：湾奥の後背地から湾口を望む。景観に目立った変化はなく、潮が引くごとにコメツキガニ類の集団が出現し、盛んに砂団子を作っていました。

▲ ゴマセンベイヤワモチ：A エリア後背地の石灰岩性の岩礁域で観察されました。

▲ ナタメケボリ（二枚貝）、ハサミカクレガニ：B エリアの潮間帯上部で、ヤビーポンプを用いて採取した個体。ナタメケボリとハサミカクレガニの色と形状が酷似しています。これら 2 種はタテジマユムシと共生しています。

□ 調査日 2017. 8. 19 -20

□ サイト代表者：岸本和雄（沖縄県農林水産部）

□ 調査者・調査協力者【写真撮影】

岸本和雄（沖縄県農林水産部）【a-c,e-f】 藤田喜久（沖縄県立芸術大学）

狩俣洋文（沖縄県農林水産部）【d】

久保弘文（沖縄県水産海洋技術センター）

* 環境省レッドリスト 2017、** 環境省海洋生物レッドリスト 2017

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 平成 29 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_h29.pdf)